

奥村 明 著「セレベス戦記」(第3部)

「赤道標」越ゆ

夜行軍

セレベス島北東部方面(ビトン・メナド)への敵の爆撃は、日ごとに熾烈を加えた。

敵はハルマヘラ島北東方にある小島・モロタイ島に上陸・占領し、航空基地として整備した。モロタイ島は、北方のフィリピン、西方のセレベス・ボルネオ、南方のハルマヘラ、セラム、チモールを攻撃するのに絶妙の位置にある。ビアク島を片付けた連合軍は、定石通りモロタイ島を占拠した。モロタイ島を足掛かりにして、西隣のハルマヘラ島を爆撃、ついにミナハサ半島北東端のビトゥン・メナドまで触手を伸ばしてきた。メナド死守のために派遣された歩兵部隊が到着前にセレベス海などでことごとく撃沈されたこともあり、第二方面軍は作戦を変更したらしい。昭和十九年九月下旬、第二方面軍は隷下部隊にセレベス島南西部への移動を命じた。司令部も南部セレベスへ移動することになった。メナド方面を見捨てざるを得なくなったのである。

私たちは爆撃を逃れ、軍司令部とともに急遽移動することになったが、出発直前に思わぬ悲報を受け取った。司令部の特命を帯びて、メナド北方二百キロのサンギル諸島へ機帆船で連絡に行っていた機動隊第一小隊が、全員戦死したという悲報である。小隊長八田少尉(京都出身・京大卒)は、連絡を絶たれて孤立したサンギル諸島の友軍へ食料運搬の命をうけ、小隊から二十数名の優秀な部下を選抜、勇んで出発したばかりであった。八田小隊は任務を果たし得ず、敵魚雷に捕捉されて南海の露と消え去った。あまりのあっけない最後に私たちは声をのんだ。

どんなに悔しかったらと思う。八田少尉は、関根部隊の幹候出身では先任者で、温厚な、部下思いの将校であった。私たち若い新品少尉にも思いやりが深く、兄のような存在であった。虫が知らせたのか、出発前、夫人と女の子二人の写真を取り出して独身者ぞろいの私たちに見せ、しみじみと語っていた。

命令によっては、八田少尉でなく私が行ったかもしれない。ちょっとした差で、生と死が分かれてしまう戦争の不条理を、八田少尉が得難い人物であっただけに痛烈に知らされた。これも運命には違いないが、私は司令部の無謀な命令に憤りさえおぼえた。この海域の島伝いの航行はほとんど不可能な状況となっているにもかかわらずこのような命令を出すということは、ほとんど、「死んで

来い」と言っているようなものであるからだ。八田少尉はあわれ、死ぬべくして死んだ。いや、二十数名の優秀な兵も共に、任務を遂行することなく敵魚雷の餌食になったのである。

悲憤の涙が乾くいとまもなく、追われるような命令で私たちは爆撃最中のメナドを撤収した。もちろん船を利用することはできない。危険海域を避けるため、陸路二百キロ西方のイノボントまで行軍し、イノボントで乗船して目的地に向かうということであった。イノボントまでの陸路といえども敵機の追い撃ちにさらされる。私たちは、小隊ごとに分散し、夜陰に乗じて隠密行動をとることになった。

逃亡兵の悲しみに似た苦難の行軍がいつまでも続いた。トラックはなかった。完全軍装で小銃を肩に、あえぎあえぎ山から山、ジャングルからジャングル、谷を越え、部落から部落へ歩いていくのであった。小隊は輜重車としてロダ四台を雇って、重い米袋など糧食を積んだ。ロダとは、現地人の農耕用または貨物運搬用に使う牛車のことである。

ロダは、鉄の両輪の上に荷台を据え、木製の四角な荷箱をはめこんでであった。馱者はロダの持ち主の男で、荷台の前の馱者席にすわり、牛の尻を鞭でたたき、叱咤しながら進むのである。牛は、背にコブの出た頑丈そうなやつで、湾曲した大きな角を生やしているが、スピードはでない。凹凸あり、泥濘あり、石ころ道などの悪路をガタゴト、鉄輪の音をひびかせて引っ張っていくのだが、人間の歩行よりはるかに遅い、私たちはむしろ、ロダの歩行に合わせてのろのろ歩き、坂道などでは荷車を押し上げてやらねばならなかった。

それでも、一日に二十キロから三十キロは歩いた。夜は歩きづめで、朝になると人の住む部落をさがして宿営した。このあたりの普通の民家は、暑さや湿度の対策からか床を地面から二メートルほど上げた「高床式」で、家の三方は手摺のついたベランダになっている。そのベランダが、私たちの昼間の揺りかごであった。一つのベランダは十人ほどの一個分隊が昼寝の夢をむさぼれる程度の広さである。夜になればまたぞろ起きだし、ロダを叱咤しつつ行軍を始めるのであるのであった。

三日目の宿営中に、双胴P-38の大編隊が頭上を通過していくのを見た。出発時、爆撃の轟音を聞き、行く手に火焰の燃え上がるのが見えた。近く村はほとんど人影を見なかった。風雲急を知って、いち早く避難したものとおもわれた。ロダの牛はおびえて前へ進もうとしない。そのうちに、スキを見て逃げられてしまった。やっと人影のある村を見つけて部落の長老らしい男を手まね足まねで説得して、ロダ4台を馱者ともども徴発することができた。交渉は、言葉の通じないもどかしさもあったが、最終的には銃と軍刀がモノをいったらしい。背に腹はかえられなかった。しかし、報酬は過分に与えたうえ、馱者には親切に接するよう、私たちは心をくだいた。

活火山のふもとへ来た。野積みの硫黄がもえている。進行方向の道路わきに大穴がえぐられている。トラック十台くらいが入れるほどの、大型爆弾投下による穴であった。急いで通りすぎると、友軍の兵士に会った。アムラン飛行場の勤務員である。やっと、アムラン港まで来たのだとわかった。兵士は、通過部隊であるわたしたちに教えてくれた。

「飛行場は、ここから八キロ先の椰子林のなかにあります。北部セレベスの飛行場が空襲で次々と粉砕されるので、隠し飛行場として山手から海岸にかけ、三、四条の滑走路だけのものを建設したんですが、ここも敵に見つかりました。数日前から米軍機の爆撃にさらされているので、気をつけてください。この道をそのまま行くと、滑走路を横断することになります」

滑走路をふくめた飛行場の横断は、全コースで五、六キロということであった。急行すれば1時間とかかるまい。おくらしているロダを待つ間、アムラン湾にむかって休息した。闇のなかに、チャプチャプと、渚に寄せる波の囁きがきこえ、夜光虫のねばったような青い光が樹間の向こうにきらめくのが、疲れをいやしてくれた。

ロダが追い付いた。しばらく休息を与えたあとで、私は強行軍を号令した。

行進をはじめて間もなく、敵機が一機海岸沿いに近づき頭上をかすめたが、滑走路と思しきあたりに一発落とした。かまわず前進した。どうやら敵の爆撃は、一機ごとに間隔をおいた波状攻撃と推定できたからだ。次の爆撃があるまでに飛行場を横断してしまいたい。

「駆け足、進め」私は軍刀を抜きはなつて、先頭を突っ走った。小隊は私に続いた。馭者は狂乱したように鞭でしごく。牛は跳ね上がり、猛然と駆けてゆく。

牛も車も兵士も、闇のなかをめぐらめっぽう、ダッダッダッと土をける靴音、ガラガラと悲鳴に近い鉄輪の響きをあげて、ただ走る、走る。坂道、窪地でロダが停滞すると、兵士たちは手綱をにぎってひっぱり、車の後押しをした。全身沸騰の汗で火の塊りとなって、ただ、前進あるのみ。

十分ほど走ると、地上で飛行機のエンジンの音がした。パッと闇をつらぬく大きな光芒。一周だけ椰子林の中の飛行場が一部だけ、顔をのぞかせた。友軍が飛行機の整備をしている。しめた、と、私は思った。もうひと息だ。いまのうちに飛行場を突破しなくてはならない。

さらに力をふりしぼって走り出した。だが、このとき、敵機の爆音が聞こえた。友軍機のエンジン始動とライトが敵を誘引したらしい。空襲警報のサイレンが鳴り渡り友軍機のライトは消されたが、すでにおそかった。敵は飛行場もろとも、私たちを捕捉したのであった。これこそ、飛んで火に入る夏の虫、というところであろう。

「全員、散れ！」私は、闇の中で絶叫した。四、五人で横っ飛びに道路脇へ避け、雪崩れるように伏せをしようとした瞬間、足を踏み外してズルズルと大穴の中へ転落した。折り重なり倒れたとき、顔が穴の壁に押し付けられた。土は、なまあたかく硝煙くさい。(しまった。さっき落ちた爆弾の穴だ)。危険を感じ、這い出そうともがいた。場所を変える余裕などはなかった。

一大閃光。思わず身をちじめたが、つづいて天地炸裂の轟震動に胴腹がえぐりとられたような衝撃を受けた。直撃弾で私の体は二つに引き裂かれ、魂だけ呻きながら、断末魔の意識を持続している。そんな気がしたほどであった。だが実際は、重い土砂の壁がなだれ落ちて、その下敷きで下半身が埋まっていただけであった。

のこのこと這い出し、穴の縁にとりすがって砂だらけの鎌首を持ち上げて空を眺めてみた。敵機

は高度をあげて、いずこともなく立ち去った。

先ほどの爆弾は、その前の大穴の数メートル横に、おなじような大穴をうがっていた。不思議に全員無事であった。敵の爆弾の穴が敵の爆弾から私たちを救った。一度落ちた爆弾の穴に再び落ちることはないというジンクスがあり、私たちはジンクスに救われたような形になったが、このとき私たちは、偶然に前の爆弾穴に転落したにすぎない。助かった瞬間、人間というのは奇妙なもので、私の口からこんな冗談がとびだした。

「本塁すべり込み、タッチ！ こぼれ球、セーフ！」

ふたたび強行軍を開始した。ロダの馭者は爆撃に震えあがり、これ以上は勘弁してくれと哀願した。二人の若い馭者は尻ごみし、わめいたり泣いたりした。兵士たちは馭者を殴りつけた。言葉がわからないためのいら立ちもあるが、一刻を争う気持ちで兵士も殺気立っていた。しまいには兵士自ら手綱を引き、二人の馭者は、泣きながらロダのあとから走っていた。戦争に無関係な彼らにとっては迷惑この上ないことであろう。可哀そうでならなかった。無慈悲なことであるが、他に方法はなかった。(戦争のどさくさに君らも巻き込まれたんだ。俺たちだってどうしようもないんだ。しばらくの辛抱だ、許せ)

第三の滑走路（その巾は六、七十メートル）を横断。三十分ほど走ってやっと飛行場をぬけ、シダーという村に入った。夜が明けた。兵士も車もガタガタになっていた。考えてみると、一夜で三十五キロほどぶっ飛ばしたのである。

セレベスには鉄道もなく、長路の交通機関は自動車しかないのであるが、軍は一台のトラックはおろか自転車さえ、放浪部隊の私たちに支給してくれなかった。物量と機動力を必要とする近代戦のなかで、私たちは完全軍装の行軍という、日露戦争以来の調練にモノをいわせるしかなかった。行く先々で私たちを待っている任務は、土方か沖仲士であった。それは、作戦の失敗もしくは齟齬によってはみ出して、私たちが員数外になったからだろうか。それでも何かの役には立っているに違いないが、このながいながい炎熱下の行軍の苦痛は、戦力の無駄な消耗と思われてならなかった。兵士たちのほんとうの苦労は、はなばなしい銃撃戦や白兵戦にだけあるのではなくて、ながいながい無意味なほどの消耗に耐えることでもあった。

武勲も立てず、命令のまにまに転進をつづけ、見知らぬ土地でわけもわからないままに死に絶えて、そこで歴史から葬られてしまう。この運命に耐えることだけが、多くの兵士たちの「戦争の実感」にほかならない。私たちは、爆撃にも行軍にも、この不断の繰り返しに我慢ならず、耐えることによって生を確かめるしかない状態であったが、それでも命令にそむいたり脱落しようとは思わなかった。目的地に行きさえすれば何かが待っている。いくら失望しても、再び希望をだいてたち上ろうとした。そしてこの場に及んでも、日本が負けるということは誰一人として思いもしなかったであろう。

さて、私たちはシダートの村で装具を解き、民家のベランダで夜を待つことにした。牛に飼い葉

を与えたあと、ロダもろともベランダ前の椰子の木に縛りつけ、荷台からは最小限の物品しか降ろさないことにして、一応、村人にロダの交替を打診してみた。泣きながらついてきた土民の馭者が気の毒だったからだ。しかし、この村のロダは、奥地へ避難してしまったあとで、一台も残されていなかった。やはり、軍票を過分に与えておだてあげても、目的地まで行ってもらわねばならない。やむなく不寝番をたてて、ロダを厳重に監視した。

夕暮れ、いざ出発というときに、馭者三人の姿が見えなかった。牛車をすてて脱走したらしい。牛は日本兵の言うことを聞かない。泡を食った私は「あれだけ気をつかい、大事にしてやっているのに」と、本気で腹をたて、一個分隊に追跡を命じた。まだ、それほど遠くへ逃げているはずはなかった。分隊は五分もたたないうちに戻ってきた。

「見つかりました」と、分隊長は報告した。「草むらにしゃがんでいたのだからなかったのですが、土民は小便をしていたのであります」

馭者たちはケロリとした顔で戻ってきた。私はおかしくなり、「テレマカシ」（ありがとう）とお世辞をいった。

「小隊長殿、こいつらの小便は、女のようにしゃがんでやるんですな」兵士たちは笑いながら報告した。この小さい出来事は笑いがまじって、兵士たちには新しい活力が湧いてきたようだ。隊列を整え、私たちは元気にシダート村を出発した。

翌朝、ポイガル村に到着。シダートとポイガルの間で、本隊から遅れたロダ護衛の第二分隊長石田軍曹（新潟県出身）が、敵機にのろしの合図をしていた土民を捕らえた。そいつを椰子の木に縛り、仮眠をとっている間に逃げられてしまった。これで、土民のなかにスパイがいることがはっきりしたので、今後は民家で昼寝の夢をむさぼってもいられない。今後、道中どんな危険が待ち伏せているか、一層用心しなければならなかった。

村人の動静をさぐる必要からも、私はマレー語のにわか勉強をはじめた。セレバス島の土民の標準語はおおむねマレー語で、メナドを離れると英語を話せる土民に会うことは皆無といってよかった。連隊単位の行軍なら、一小隊長がそれほど気を配る必要はない。しかし、現状のような行軍で何かの拍子に小隊が孤立してしまうことを考えると、小隊長の責任もそれなりに重くなる。今後のためにも、現地人とのコミュニケーション能力を磨く必要があった。

今までは、ピサン（バナナ）、アダカ（あるか？）程度の片言でごまかせたが、スパイ対策、情報蒐集、大きく言えば政治的・経済的な取引や折衝などに意思の疎通は欠かせない。ちょうど、兵士の中に、メナドの在留邦人にゆずってもらったという「マレー語読本」を持っている者がいた。早速それを借り受け、日課の午睡を返上して猛勉強をはじめた。

ポイガルを出発してボラン、ロンバギンと進む道すがら、読本を鞆にしのばせて、口の中でマレー語の単語をくりかえしながら歩いた。

さっそく、それが役立つときがきた。ある村で、馭者たちが私に哀願した。

「コレカラ先ハ行ツタコトガナイ。イノボントマデ行クノハ道モワカラナイ。コノヘンデ帰シテクレ」

何度も聞き直して、やっと彼らの言い分がのみこめた。今までなら、拒否の態度だけがわかり、言葉が通じないために、暴力をふるってでもこちらの意に従えたであろう。

「じゃあ、こうしよう。交替の口ダを連れてきたら、いつでも帰してあげよう」

私は吃り、何度も修正しながらも、マレー語で何とか意を通じることができた。彼らには死にも狂いのチャンスであったのだろう。夕暮れまでに、ちゃんと交替口ダ四台をともなって、意気揚々と私の前に現れた。私はかれらの労をねぎらい、礼を述べて親しく肩をたたいた。言葉が通じることは、心が通じることでもあった。

彼らは何度も頭をさげ、交替の若い馭者に激励のことばまでなげかけて、牛に鞭をあてた。口ダは、元来た道を軽快にすべり出した。解放された喜びが車軸のひびきにもこもっていた。彼らは歌をうたい、口笛をふき、原野に放されたウサギのように嬉々として遠ざかってゆく。私もうれしかった。別れの感動が、意外に純粹だったせいもあるが、何よりも、速成のマレー語がモノになったという気分のよさのせいであった。

新しい口ダをつれて行軍開始。だが、目的地は思ったより近くにあり、馭者の青年たちもよく地理をわきまえていた。敵機は二、三度、頭上を通過した。彼らの目的は飛行場であるためか、私たちへの爆撃はなかった。

米はあったが、副食は缶詰だけで、宿営のときに椰子の実の汁を吸い、パパイヤなどももぎとってむさぼったが、偏食の熱帯地行軍である。マラリア蚊には刺されどおしで、熱発患者もふえていった。

苦難の行軍が続いたが、十月の初旬、椰子林を抜けるといきなり眼前に町が現れた。私たちは歓声をあげた。そこは、めざすイノボントの港町であった。

クワンダンまで

イノボントには、第二方面軍司令部の連絡所があった。連隊の宿泊設営もすでに出来上がっていて、私たちははじめて、親元に帰り着いたような安堵をおぼえた。

一日、二日をへだてて、後続部隊がハトハトになって辿り着き、中隊、連隊はメナド出発後約十日を経てイノボントに集結をおえた。意外に、病人が多かった。中島中隊は健康組を主軸にして編成替えをおこなった。私が健康組の最右翼小隊長として五十名、山崎准尉が二十名、重症で治療中の寺内少尉が看護兵付の病者計四十名の長となった。フィリピン出発時に全員健康であった中隊二

百五十名が、戦死、入院、発病と減殺されて、イノボントでは戦闘（作業）に耐えられる者はおおむね半数となったのである。

それでも連日連夜の強行軍は終り、目的地に到着した。本体に復帰できたのであった。わたしたちは宿舎で思いきり体をのぼし、足のマメの治療をした。あとは輸送船を待ち、海路を司令部の誘導にまかせるだけでよい。もう、行軍はこりごりだ。ロダも気持ちよく引き返して行った。しかし、一週間待っても輸送船は入港の気配がなかった。

突然、命令がでた。私と山崎准尉の健康小隊は、連隊副官白田大尉（愛知県出身）の率いる七十名とともに、西方百キロのボロコ港より一足先に乗船せよ、という命令である。また、行軍か、と私たちはうんざりした。しかし、ここに野戦病院がないため、急遽病人を南下させる必要上、寺内病人小隊もボロコへ向かうことになった。病人たちに比べたら健康な私たちが百キロくらいの行軍に文句をつけるわけにはいかない。それに、健康組の私たちは一週間の休養で、すっかり元気を回復していた。

私はふたたび交渉して、ロダを雇った。寺内小隊のためにもロダ数台を配備させた。イノボントの町は大きく、ロダも難なく手にいれることができたが、私のマレー語も板についてきたということかもしれない。マレー語は、ロダの若い馭者たちとバカ話をしておれば自然に上達するのだから、こんなすばらしい教師はない。

私たちは中島中隊長に別れを告げ、先発隊としてボロコへむかった。（中島中隊長を見たのはこれが最後になった。）イノボントから西への行路は敵機に遭うこともなく、白昼の行進も可能であった。

メナドからアムランまでは、ジャングル地帯、椰子林、飛行場横断等で障害も多く、敵の至近弾を受けたりしての猛進撃でああったが、ここからボロコまでは白昼の行軍なので、目が見える。地図はないが、土民の馭者は生き字引と言ってよいほど、このあたりの地理に明かるい。私たちは海岸線に沿って、湿地、草原をふみこえ、かなりのんびりした歩行で進んだ。はじめは大名行列よろしくの気分で、えんえん長蛇の列をつくり、ゆっくり進んで行ったが、白昼行軍にはそれなりの陥穽があった。朝のうちは涼しいが、暑くなりはじめると容赦なく照り付ける赤道直下の太陽が、あたかも、焼き殺さんばかりの烈しさとなる。今度は炎熱地獄に苦しめられた。

海岸線の椰子林が不意にとぎれ、湿地帯がどこまでも続く。広大な草原を何キロもふみこえて行くとき、茫漠たる周辺に、蔭のある一本の樹木とてない。熱射病やデング熱で倒れる者が相次いだ。

途中、ビンタウナとか、ビンビというような小さな無人部落に宿泊し、五日目にやっとボロコに到着した。三方をジャングルと高い断崖にかこまれた山上の部落で、小型鉄鋼船の入港を待った。

翌朝、これまでほとんど姿を見せなかった敵機が、超低空であらわれて港湾施設を粉碎した。それで、また命令変更。今度はさらに西方百キロのクワンダン港に転進せよ、というのである。ミナハサ半島を西へ西へ、先行競争をやっているような、まるでイタチごっこである。

「バカにしてやがる」と、ぶつぶつ言ったところではじまらない。命令には従うよりないのである。

私たちは再び歩きだしたが、いつの間にか中百メートルくらいの河川に行く手をさえぎられた。原始時代から流れっ放しという感じで、堤防も橋も、人工の構造物は何も見えなかった。兩岸は茅が密生している。斥候にさぐらせると、水深三メートルで、白濁の流れはかなり速く、泳いでわたるのは無理だという。私たちは腰をすえて、木を切り倒し、藤で編んだ筏を数隻つくりあげた。

最初の筏は、ロダと馭者、兵士五、六名が乗って出発した。牛は筏にのせず、手綱を曳いて泳がせた。私は指揮者の一人として、冒険先発隊に参加しないわけにはいかない。心得ある兵士が、手製の棹で筏を漕ぎ進める。急流に翻弄され、あやうく転覆しそうになりながらも、みごと、向こう岸に着くことができた。牛もよく泳いでくれた。

全身びしょぬれで、茅の穂につかまって岸にはいあがると、ふんどし一本の裸体になって装具を乾かした。私は水に飛び込んで水浴しながら、原始的な速成筏で必死に近づいてくる後続部隊を見守っていた。笑いがこみあげてくる。思わぬ障害物に遭ったが、炎熱行軍のあとの水遊びと洒落ることができた。なかなか風流な眺めではないか。牛がうまく泳いでいる。ユーモアがあるじゃないか。第三陣がつづいてきた。

このとき、またもイタチごっこがはじまった。爆音が雲の中から湧いてきて、向こうの椰子の梢すれすれに真っ黒な四発爆撃機が怪鳥のような姿をあらわしたのだ。

やられる！ 素っ裸の連中は河原の砂地を向こうの灌木帯めがけて突進した。後続の筏は、完全に攻撃目標となった。筏上の兵士たちは本能的に川へ飛び込み、逃げるカエルの子のように水中に潜った。

私は、トゲだらけの藪のなかへ頭からすべりこんだ。そこは土民の墓場であった。頭をもたげてみると、敵機の星のマークと、胴下に巨大な爆弾四個を抱えているのがきらりと眼にとびこみ、爆風が藪全体をなびかせた。お陀仏にはもってこいの墓場であった。一瞬、わたしは祈った。丸裸というものは人間を意気地なくさせるのか。メナドの埠頭での爆撃中、直立不動で立ちはだかっていた私はどこへ行ってしまったのか。いかだ運航中の分散隊形では指揮がとれぬというのか。抵抗を失った赤裸な弱い人間として、念仏を唱えんばかりの情けない心境で藪のなかにひそんでいた。

豪胆、勇気、戦線で鍛えられた軍人としての自信も、時と場合によっては全く当てにならないものである。

奇怪にも、一発の爆弾も落とさず、機銃掃射も浴びせずに立ち去った。戦争には、奇跡もあれば、理解に苦しむできごともある。特に、敵の心の中は察知しようもない。私は、全身血だらけの裸体で、藪から這いでた。結局、何事もなかった。みんな肝をつぶしたはずなのにケロリとしている。これまた、たのもしくも、奇怪なできごとであった。

マラリアで一村が全滅したと伝えられる村を過ぎ、わたしたちは切り立った断崖と海岸との間の細い道を、田舎大名の行列よろしく一列で縫っていった。断崖の頂上は樹林でおおわれている。海辺には奇岩も突出しており、ちょうど日本の伊豆か熱海の海岸線を歩いているようであった。目も

くらむ炎熱も、背景に断崖がそそり立ち打ち寄せる白波で目にすずしく、びょうびょうたる海洋を眺めて歩くと救われる思いがした。まことに海は、貝殻の響きがする。広大で涼しい夏のゆりかごだ。ここは、セレバス海からマカッサル海峡に続く広い海だが、セレバス島西海岸沿いに臨むといつも瀬戸内海のようにおだやかであった。

熱射病対策の耐熱行軍というなら、イノボント〜クワンダンのコースは、地球上こんな恵まれたところはあるまい、と皮肉も言いたくなるくらいだが、それゆえにこそ、海に出逢ったときのほっとした心の安らぎは格別なものであった。砂地をなめる白いあわの波は、干からびて息たえだえの私たちの胸を浸すようであった。海の色、ゆたかなうねり、静かで平和そのもののような海の広がりは、私たちの魂の底ふかく、永遠のひびきを立てているようであった。

しかし、この海こそ、戦場の第一線であることを、私たちは思い知らされることになった。海を眺めている私たちの目に、沖からくる黒い渡り鳥のひと群れが映った。それは、詩的な感動にゆり動いていた私の目の錯覚で、まぎれもない敵機の編隊であった。轟音とともに海上すれすれに近づいてくる。胴腹に星のマークも鮮やかな、グラマン艦載機の大編隊であった。

「空襲！、散開！」私は号令を発したが、海と崖にはさまれた一本道では退避する場所もない。私たちは立ったまま断崖にへばりついた。板壁に密着したイモムシかヤモリか、息をつめ吸い付いて離れまいとしていたが、断崖の斜面いっぱい張り付いたマネキン人形のようなものでもあろうか。グラマンの編隊は、五、六十機と推定された。すこし斜め横の態勢で海面上を迂回したため、私たちは断崖に萌え出た黄色い雑草のような保護色となったのかもしれない。敵機は轟々と頭上をかすめ去った。

「おとぼけアメちゃん、びっくりさせやがる」兵士たちは罵りながらも愁眉をひらいた。しかし、私たちはこの事実を肝に銘じなければならなかった。グラマンの大編隊は、近くの航空母艦から放たれたものに相違ない。敵の機動艦隊がこの付近海域まで迫り、わがもの顔に遊弋しているのだ。美しい海の幻想はたちまち崩れ去った。

クワンダンが近づくにつれて、草原地帯が多くなった。葦の草原をうねりくねる一本道を進んだ。草原には数百頭の巨牛がうろついていた。ここは昔オランダ人が経営していた大牧場のあとなのであろう。牧牛が荒々しく野生化して、管理人のいない大草原をわがもの顔にふるまっているのであろう。一本道を占領している牛の一群は、私たちが近づいても動こうとはしない。シツ、シツ、と追い、石をなげてもビクともしない。一步も進めなくなった。

「全員、弾込め！」業をにやして私は号令をかけた。

驚いた口ダの若者は、私たちを制し、飛び降りて鞭を空にふるいながら頓狂な声をあげて、牛を追ひ払おうとした。不思議にも、牛は静かな唸り声を発しつつ、ゆっくり道をあけた。

まるでアフリカ探検の旅行者にでもなったような猟奇的な気分が、野生の牛の大群を分けて進む私たちに、ひとときながら行軍の苦しさを忘れさせた。一本道は坂になって、高台に突き当たった。

高台からは、港の石油タンクがかすんで見渡せた。目的地クワンダンの港である。ロダの馭者の説明によれば、ここは、クワンダン湾東方・サミア岬の真ただ中にあたるという。クワンダン村まで十五キロの距離である。都合よく、竹の柱にニッパ葺き屋根の一軒家が、ぽつんと建っていた。私たち小隊は、この空き家で宿営して小型鉄鋼船の入港を待つこととなった。

白田副官の一行は、そのままクワンダン村向け前進した。私は副官に連絡係を命じられ、山崎准尉の一行と寺内病人小隊の到着後の仮泊宿舎設営と出航までの緊密な連絡・命令受領など、一切の責任を負わされた。

病人小隊を護衛しながら寺内少尉の一行がへとへとになってサミア岬にたどり着いたのは、それから三日後のことであった。

クワンダン付近の草原は、東西中五キロ、南北延長約二十キロにおよんでいた。私たちの仮泊バラックは、岬の丘陵でも最高所に位置していて、草原につづく山脈、クワンダン湾一帯など、一望千里のすばらしい眺めであった。草原には牛のほか、鹿の大群もいた。イノシシまでバラックの近くまで姿をあらわした。湾のほうへ降りてゆくと、湿地帯にワニが棲息していた。いわば、この草原は、南方野生動物の雄大な幽玄境と言ってもよい。しかし、危険に遭遇しない限り一発の小銃弾も撃ってはならない。弾薬浪費厳禁、武器弾薬欠乏の日本軍だ。

私は、クワンダン村の本部で、中隊指揮班の曹長が連絡用に使っていた一台の自転車を借り受けることができた。週に三日、連絡のため、白田隊、山崎隊、寺内隊とまわるのであったが、往復三十キロの航程である。自転車は便利であった。フルスピードで疾走し、湿地にワニのすがたを見ても足がすくむことはなかった。しかし、クワンダン港にも敵機が跳梁しはじめ、頼りの小型鉄鋼船はやってこなかった。気がつくと、高台のバラックに仮泊してから十日をすぎていた。

耐えることを体で学んでいた私たちも、「いったいぜんたい、どうなったんだ」と、ときどき顔を見合わせて愚痴を言った。メナドを出発してから一カ月がすぎていた。爆弾の下をかいぐり、やっと目的地へたどり着いたと思うと、そこもあぶない。次から次へ、港から港へと、はかない希望にとりすがってやってはきたものの、いつまで経ったら終わるのか。戦局はツンボ状態におかれていて一向にわからない。目隠しをされたまま先へ先へといそいでいるようなものであった。

もし、どこの港でも迎いの船に見放されるとなると、どうなるのだ。海岸線沿いにセレバス島最南端まで歩くことになるのか。最南端に行きついたところで全員が無事とはかぎらない。健康な幾人かが目的地にたどり着いたところで、待ち受けている敵に一網打尽ということになるのではないか。そこは、最後の袋のネズミになるころかもしれない。いや、ビトンに上陸したときすでに、セレバス島全島の日本軍は袋のネズミになっていたのではあるまいか。まことに心細い話であった。何もわからない、何も知らされていないことが不安をそそった。いったい、俺たちはどうなるんだ。だれも答えてくれない。もはや封鎖された世界で、一喜一憂のデマの材料さえひとつもないのであ

る。

このようなある日、私は堀川兵長（奈良県出身）の分隊を率いて、一つの探検にでかけた。私たちのバラックから五百メートルほどはなれた草原に、草ぶきの小屋が建っていた。やはり、昔の牧草地の管理人小屋か番人小屋に違いないと考えたが、よく観察してみると、ときどき細い白煙があがる。これが炊事用の煙とすれば、人が住んでいるにちがいがなかった。スパイ、ということも考えられた。しかし、敵のスパイであれば、近くに日本軍が宿営しているのに、平気で炊事の煙などあげていられまい。好奇心もあったが、一応、警戒態勢でおそろおそろ近づいて行った。

小屋は床を高く上げている一坪ほどの茅葺きのもので、周りを耕して野菜畑にしていた。自給自足で、人跡未踏の大草原にポツンと一人住んでいるらしい。私はマレー語で声をかけてみた。応答はなかったが、勝手に戸をあけてみた。

一人の黒ん坊が、高い床の上にすわっていた。土民式の腰巻ひとつで、上半身裸である。淡褐色の肌は、アフリカ系の黒ん坊ではなく、セレベス原住民の子孫にちがいがなかった。年はよくわからなかったが、初老に近い感じであった。彼はたしかに私の声を聞き、軍刀をたずさえた私の姿をちらりとでも見たはずである。私のマレー語は通じなかった。おそらく、初めて見る日本軍人の不意の侵入に驚いたであろうが、眉ひとつ動かさなかった。何の感情もしめさない。

驚きの余韻は、ポカンとあけた厚い唇に示されてもいるようであったが、目は、虚空の一点をにらんで動かなかった。

わたしは、その目の深い凝視に、無限の哀愁を感じた。銃を構えた兵士たちが私のあとに続いてきた。土民はビクとも動かない。タジタジとなったのはこちらの方であった。

床下には炉が掘ってあり、椰子の実の殻や木切れが、かすかな炎をあげて燦り燃えていた。炉の傍らには、椰子の実の殻や薪が積み上げてある。水がめ、まな板、斧、野菜を入れた土器など。

小屋の柱には、埃だらけの大鹿の角、ベッ甲亀の甲羅などがぶらさがっていた。棚には原始的な狩猟ワナー式、――。

するとこの男は、狩猟をやり、野菜を植え、たった一人で生き抜いているのか。私はここで、彼の孤独な、悟りをひらいた仙人のような、静かな生活を見つけたのだと思い始めた。スパイなどと考えた自分を恥じた。彼の悲しげな目つきには、戦争をしている文明人をあわれんでいるような、また、戦争などどこ吹く風と言わんばかりの冷やかな無関心も感じとられた。私は降参した。黙って引き揚げるしかなかった。

「失礼しました！」日本語で言って微笑し、挙手の礼をした。そして兵士たちに退去するよう合図した。そのとき、土民が手まねで「待て」というような表情をした。彼は、黒い焼け跡のある竹製の長い火箸を使って、燃えた炉の中をかき回した。ふっくらと焼けたサツマイモが、灰のなかから転がり出た。彼ははじめてニヤツと笑った。無邪気な、人のよい笑いであった。手振りで私たちに「食え」というのである。

わたしは、意外な御馳走にありついたわけだ。真っ黒な、熱い芋の皮をむいて、土民の心境でむさぼり食った。やきいもは内地出発以来である。ことばに尽くせぬ味であった。彼も白い歯をむきだして無心に食っている。

この仙人めいた男にとっては、オランダもアメリカも日本も眼中に無いにちがいない。敵も味方もない素っ裸のひとりの人間である。世界に怖いものはひとつもないはずであった。腹が減ればモノを食う x x 的な人間の原点というべきものと、彼は虚心に向かい合っているのであった。わたしは、芋を食いながら感激していた。いったい、文明人の私と原始人の彼と、どちらが幸福なのだろうか。どちらが充足足りており、自分の人生に誇りをもっているのだろうか。

礼をのべて屋外へ出ると、そこは大草原のまっただなかであった。陽はかがやいていた。「この無尽蔵、未開発の大地、ああ、もったいない！」堀川兵長は感に耐えぬように叫んだ。「大自然の中で、のんびりとひとりで暮らしていたんだなあ。実に幸福そうじゃないかあの土人。うらやましいなあ」

ワニの沼

私の不安は的中した。十五日たっても、迎いの船はやってこなかった。白田副官によると、船はことごとく付近沿岸で撃沈され、海路の連絡は完全に断たれたらしい。最悪の予感通りになった。

陸路を南セレバスまで行軍するしかない。副官は独断で、絶望的な命令を発した。

連隊本部付きの岩本少尉以下四十名、山崎准尉以下二十名、奥村少尉以下五十名は、岩本少尉指揮のもとにクワンダンを出発、陸路、南部セレバスに到着すべし、という命令である。行程は約二千五百キロ、所要日数は約六カ月である。米は現品二〇日分携行、缶詰若干、爾後の食料は現地調達せよ、という。

白田の命令が絶望的なひびきをふくんでいたのは、彼が、「おそらく、目的地到着までに、疾病と飢餓で、約半数の損害は覚悟しなくてはならない。軍は半数死すと、これを全滅という」とつけ足したからである。

人跡未踏の土地を二千五百キロも歩く（これは、日本列島を青森から縦断南下すれば沖縄までの航程である）所要半年の強行軍に、たった二十日分しか食料を与えないというのは、不可能と知ったの命令で、「死ね」という意味か。敵を撃破するための「死」ではなく、「歩き疲れて死ね」という命令は、前向きな意味がどこにもない。命令には服従するしかなかったが、さすがに私は考え込んだ。

もし、「死」が必然的に私たちを襲う運命なら、ここで、じっと、あの仙人のように暮らしてみたらどうなのだ。敵が上陸してくれば、我らも軍人である。いさぎよく最後の一兵まで戦い、玉砕し

てもよいのではないか。半年もの行軍で疫病と飢餓にたおれ、炎熱地獄をわざわざのたうちまわる必要などないではないか。だが、メナドまで引き返すこともできなかった。ここにとどまる自信も、命令にそむく勇気もなかった。もはや、死ぬまで歩いてみるよりほかなかった。

命令通り、私たち三個小隊が岩本少尉の指揮でクワンダンを出発したのは、昭和十九年の十一月一日であった。

まず、南に向かって山脈を横断、イシムに出て南海岸側（トミニ湾側）のゴロンタロに到着。そこから海岸線沿いに西進した。三つの小隊は、いつしか各隊ごとに間隔を広げて、きれぎれに分断された。各小隊単位で勝手な行動をとるようになった。わたしは、宿泊設営や仮泊地での食料調達の場合、小人数でまとまるほうが得策と考えた。しかし、このバラバラな小隊毎の分断は、小隊長間の確執もあったからである。

歴戦を誇る九州男児の山崎准尉は、つね日頃から岩本少尉と犬猿の間柄であった。同じ中年の岩本少尉が、実役は少ないにもかかわらず連隊本部付きとして先に少尉に任官したのを、山崎は根にもっていた。このたびの指揮官が、序列上当然の岩本に決まったとき、山崎は、「あんなやつは命令は絶対に聞かんぞ」と豪語した。そのような山崎の狭量を私も批判していた。一応、少尉である私のためであろうが、山崎小隊をも掌握するのは当然のことながら、山崎は、「こんな小僧に何がわかるか」という態度をしめした。そして出発一時間後には、私の隊列から次第にはなれていったのであった。

後方から、のそのそと従っていた山崎小隊ははるかに離れ、雲か霞か、姿をけしてしまった。岩本も、「勝手にしやがれ」と山崎准尉に唾を吐きかけ、わたしの小隊からも離れていった。それなら「勝手にしやがれ」と私も肚をすえた。しかし、小隊長同士の確執は表面的な動機に過ぎず、真実は「死の行進」を命じた連隊本部への虚無的な反抗のためであろう。死ぬも生きるも「かってにしやがれ」であれば、行動を小隊単位にしぼって、自由奔放に生存を勝ちとらねばならない。小隊同士の分裂は、言ってみれば心理的な一種の戦場離脱であるのかもしれない。

ただし、行程は海岸線沿いに進むのであるから、港や村落の拠点をつたよりにして、それぞれの小隊がよりどころとしていた。おそかれはやかれ、町や村や港の宿泊地でお互いの消息がわかる仕掛になっているので、気にかける必要はないのだ。むしろ、互いに競争意識がうまれ、私の小隊では、一人の損耗もなく目的地へたどりついてやろうというように、小隊単位の士気が鼓舞された面もあるといえる。

宿泊地では、野菜のかわりに野草の新芽、バナナの幹の芯、未熟のパパイヤなどを採集した。白い花が咲き誇っているように見えるカポックが群生するピラトゥの村を過ぎ、ティラムタの無人村へ入ったときには、副食の缶詰を食い尽くしてしまっていた。ほとんど絶望的な気持ちで、現地調達のために空き家を一軒一軒のぞいてまわった。

窮すれば通ずというか、放し飼いの鶏がかなりの数残されているのを発見した。捕らえようとすれば空中高く飛び上がる高跳び鶏を、必死になって追いかける。軒先に吊ってある籠の中から生みたての卵を見つけてきたり、米を罌にしかけて取り押さえたり、ああらゆる知恵をしばって鶏どもと大乱闘を演じた。

奮闘努力の末に入手した貴重な鶏であるが、それを親子丼にしては小隊五十名全員を満足させるには足りない。そこで知恵を絞って、まず、丈夫な雄鶏を飼育して闘鶏に仕立て、他の雄鶏に戦いを挑ませて、負けた鶏を丸焼きにする方法を学んだ。村中の鶏を残らず取得するまでは出発しないという熱の入れ方で、鶏と格闘した。

それでも、鶏捕獲に小銃を使うことは厳禁した。女性はもちろん影も形も見えなかったが、暴行掠奪の類は厳禁した。したがって、鶏捕獲のあらゆる技術が発明されるのであった。なかでも橋本曹長は、その方面の名人とよばれるようになった。

熱を入れ過ぎて、終夜、鶏さがしに狂奔していた橋本曹長は、ある夜、コケコッコー、コケコッコーと鳴きながら藪の中へ突入した。その後二、三日昏睡状態に陥っていたが、正気にもどった後は鶏肉を絶対に口に入れなくなった。鶏の靈魂に崇られて一時的な発狂状態になったのか、このようなエピソードが生まれたくらい、全員が鶏に狂奔したのである。

次の宿営予定地は、マリサであった。炎熱の強行軍はついに落伍者をだした。行軍は、当然ながら一步でも前進すれば目的地が近づくことになる。そこに無意識ながら指揮者の食欲さが出たのかも知れない。「要するに、荷物が重いんであります。隊長殿の足が速いんであります」と、伝令の山村上等兵が言いにくそうに兵士たちの苦情を訴えてきた。

私は反省した。軍規にしばられていたからだ、と私は思った。要するに私たちは目的地に着きさえすればよい。軍規から解放されればもっと楽に歩くことができる。これまで、私は先頭をぐんぐん歩いていたのだが、考えがまとまるとニヤリとして命令をくだした。

「全員、できるだけ身軽になって歩け！」

私は隊列の後尾へまわり、軍刀をロダの上に放り投げた。次に、上衣、シャツを脱ぎ、半裸体の丸腰になった。兵士たちポカンとして私を眺めていたが、兵士全員が装具をはずしシャツを脱いで半裸体となった。有史以来、こんな皇軍の行軍を見たものはあるめえ——と、洒落などとばしながら。

それ以来、落伍者（病人隊として看護兵をつけ、特別あつかいにした）も少なく、マリサ村へ無事入ることができた。十日で三百キロ余の行程（仙台——東京）を、ともかく征服したのであった。

この裸体行進は、臨機応変、場合によってはふんどし一丁と靴だけのほとんど全裸になることもあった。聞き伝えた指揮官の岩本少尉は、私たちの軍規風紀の紊乱を難詰かとおもったが、何故か彼の小隊でも真似をした。つむじ曲がりの山崎准尉も、裸体行進を取り入れたということであった。

マリサはかなり大きな集落で、五十軒くらいの民家があった。私たちは分散宿営したが、いかに

飢えたとしても掠奪行為は禁じた。もし、私たちが弱肉強食の夜盗になったなら、けものように生き延びることはできよう。だが、荒廃するのは人間の精神であり、おそらく目的地へ着くまでに内部から崩壊するにちがいがなかった。苦難に耐えてきた貴重な体験を、一挙に悪魔に売り渡してしまうことになる。軍律に殉じるのではなく、自分に負けないためであった。しかし、この一線をまもりとおせたのは、私がまだ生存ぎりぎりの極限状況に遭遇していなかったからであるかも知れない。

とにかく、行程の八分の一は、私なりの独断専行で突破しえた。まだ序盤戦にすぎなかったが、叩けば厚い壁は開かれて、そこに明るい脱出口がのぞいた。「何とかなる」というふてぶてしい甲羅が身についてきていたのである。

しかしマリサでは、進行方向に思いがけぬ壁がたちふさがった。マレー語のわかる村民に聞くと、ここから先はしばらく陸路が絶えるという。

この地には、どこからどこまでが川か、さっぱり区別のつかない、妙にうねりくねった原始のままの河川が二本ある。そのうえ、上流のジャングルから流れ来て広い湿原地帯をつくり、いくつもの沼地をなしたままマングローブの海につながっている。湿原の幅は十数キロにおよぶ。河川の延長は百キロ以上もある。即ち、徒歩では突破できないということだ。

陸路で南下をつづけるとしても、河川をわたり百キロ西方のモウトンまで出なくてはならない。私は村人にたのみこんで、カヌーを5隻ほど借り受けた。船頭ひとりをつけてもらい、カヌーでモウトン付近の陸地までいくことにした。村の顔役は快く承諾したが、にやにやして私をおどかした。「人食いワニがたくさんいるから、食われないようにな」

カヌーは八人乗りの丸木舟に板をのせたものであった。したがって、全員を輸送するには、何隻かは2往復しなければならない。フロート付きのこのカヌーは、八人が櫂でこぐようにできていたが、櫂は一本もなかった。船頭の土民一人が麻布のふんどし姿で、帆を張って操縦した。風にまかせてのヨット式操法である。五隻のカヌーは一列にならんで川面を走りだした。

船頭は扁平な円盤型の鐘を片手にさげ、短い棒でカーン、カーンと叩き出した。口で何やら呪文をとなえている。おそらく航海の安全を祈る宗教的な儀式であろう。夕暮れの川面に映る原始的なカヌーの上で、鐘をたたき、呪文をとなえる異様な土人の裸体像は、一幅の名画をみるような趣があった。

この渡河は、敵機を避けるために夕暮れから明け方にかけて行われたので、丸二日を要した。モウトンの近くの陸岸まで達するのに、第一日目は二十時間、第二日目は七時間要した。大海原をヨットのようにゆうゆうと航行する、というわけにはいかなかった。無風地帯を何時間もただよっていたかと思うと、大暴風雨の襲来で木の葉のようにゆれ、何度も波にのまれそうになった。たこ足の不気味なマングローブの陰にカヌーを退避させたとき、丸太がいくつも漂流しているように見えたのが人食いワニの大群で、思わず観念の目をとじたこともあった。天祐というべきか、一切の障

害が間一髪というところで避けられ、原始的なカヌーに身を託して全員無事に上陸できたのであった。暴風雨の最中、転覆寸前の祈りのなかのカヌーへ、忽然とトビウオが飛びこんできた。死ぬか生きるかの瀬戸際でも、私はトビウオをつかむやいなや、さっと物入れへ突っ込むことをわすれなかった。上陸後、このトビウオを刺身にして皆に配給した。

人食いワニのいる湿地をカヌーで突破するという戦慄と冒険も、終わってしまえば蘇生の喜びが強烈に感じられるだけで、しかも新鮮なトビウオの刺身に舌つつみを打っているという現実。運も不運も紙一重という現実が目まぐるしく突き当たって、運命というものの不思議さについて考え込まざるを得ない。

結局、一発の弾丸も撃つことなくワニの群れは身をかわして去った。あれもこれも、考えてみると不思議なことばかりだ。

小隊全員がモウトンで無事な顔を合わせたとき、今後いかなる苦難に遭遇しても、絶望してはならぬ、はやまってはならぬ、と私は心に誓った。川と湿地帯の強行突破で、わたしたちはたった二日二夜で、陸路を辿るとすれば百キロ分も西へ進んでいた。

カヌーを帰して歩き出したが、まだ湿地帯が五キロほど続いている。衣服を包んであたまに載せて素っ裸である。ワニの出現に肝を冷やしながら、ときには首のあたりまで泥沼につかって歩き、湿地帯をぬけるまでに五時間を要した。

無人部落で休息し、これからのことを皆で鳩首討議した。米は、あと五日分しか残っていなかった。ポソが南下行軍の目的地とすれば、まだ、あと七百キロも歩かねばならない。百キロも進まぬうちに米は空っぽになるはずであった。とのかく、百キロ先のトミニを目標に何とか食いつないでいこう、ということになった。

米の消費を三分の一に減らし、お粥腹であるきだした。南部セレバスに近づけば、田畑は開墾されており、村の規模は大きくなって食料の現地調達は容易になる、という想定であった。しかし、実際には二百キロくらい進むのがぎりぎり、炎熱下の大地に骨と皮ばかりの餓死体をさらす可能性のほうが大きい。

「どこまでもついてくるんだぞ。だが、お前たちの面倒は見えていられなくなるかもしれない」私は、患者たちに冷酷な命令を発した。倒れた者は路上に置き捨てになる。生命力のある者だけが生き残るであろう。患者たちは赤い目をしてうなだれていた。冷酷無残であるが、限られた食料ではしかたがない。

ロダはマリサの渡河の前に返していた。荷物は兵士が分散して背負った。病人はロダに乗ることもできなくなり、杖を頼りにとぼとぼとついてきた。

村に入ると、まずは食料探しであった。畑を物色し、タビオカ芋があれば何よりもごちそうである。私は、射撃のうまい兵士を選抜してイノシシ狩りをやらせた。小銃弾の消耗もこの場合、目をつぶらないわけにはいかない。しかし、イノシシは一頭も仕留められなかった。

食料調達のために、何日も同じ村にとどまるわけにはいかない。飢えに飢えて、また私たちは歩き出すのであった。

トミニの村に入ったとき、ついに一粒の米もなくなってしまった。裸体姿で木陰に倒れ、陸にあげられた魚のように腹を上向けてアップアップした。起き上がる力もなく飢えつかれていた。あれからたった百キロで餓死することになるのか。これから生き抜こうとするなら、人間にあるまじき餓鬼道に落ち、略奪暴行も仕方があるまい。私は祈るように目を閉じていた。

「隊長殿、日本兵らしい奴が、あの横道を歩いていきました。五、六名です。間違いありません」走り寄ってきた兵士の目がかがやいている。私は跳ね起きた。錯覚に違いあるまい。

「よし、村田と川瀬は、日本兵の有無を偵察してこい。裸じゃいかん。武装していけ」

二人は小銃を担いで走り去った。やがて、躍り上がるような格好で戻ってきた。

「隊長殿、第二方面軍司令部より、自分たちのために食料を運んでまいりました。すぐやってまいります」

「そんなバカな。寝言を言うな」

しかし、私は殺気立って全員に整列を命じた。服装を正し、執銃帯剣で、二列横隊にならばせた。村田の報告は、夢でも寝言でもなかった。軍司令部の兵士たちは、百名一カ月分の米と缶詰を運んできたのである。

司令部の下士官は私に報告した。「関根部隊の一個小隊が司令部を追って陸路難行軍、という情報が、阿南軍司令官のお耳に入ったのです。たとえ小部隊なりとも、餓死同様、戦わずに犬死にさせては、天皇陛下（このとき、下士官も私たちも一斉に不動の姿勢をとった。）に申し訳がない、と閣下は申されました。命により、私たちはポソより海路で食料を運搬し、五日前からここで到着を待機していたのであります。二日前、土民からの情報がはいつていました。必ずこのトミニ村を通過するはずであると。ご苦労様であります。」

地獄に仏とは、このことであろう。まったく予期もしていないことであった。私は、「陛下の赤子を犬死にさせたくない」と思った阿南大将に感激した。私たちは見放されているのではなく、がっちり軍司令官に掌握されていたのだ。私はこのときほど偉大な軍の組織に組み込まれていることのありがたさ、力強さを感じたことはない。いまさらながら、天皇陛下の「股肱之臣」であったことをこの一瞬ほど身に染みて自覚したこともない。いずれにせよ、ぎりぎりの一線で私たちは救われたのである。

しかし、天使のような司令部の兵士たちは、温かい人情などで私たちを助け出しにきたわけではなかった。私は“助けに舟”とばかり、彼らの機帆船に分乗を懇願した。ダメなら病人だけでもポソまで運んでほしいとたのみこんだ。そうでなければ、病人たちは「犬死に」するのだと。彼らの答えは冷酷であった。

「せっかくであります、そのような命令は受けておりません」下士官は断固として私たちの懇願

を退けた。私も虫のいいことを考えたにちがいがなかった。

彼らは融通のきく“地方”の道義で動いているわけではない。鉄のような軍律の規格のなかで、命令を遵守しているだけのことであった。

船を操って食料を運んでくるくらいなら、なぜ、船で迎えにこないのか。最初は行軍に舟を廻す約束ではなかったのか。軍司令官の温情には感謝しながら、どうしてもわからない一点の疑惑がしこりのように残った。「命令」というものの中にある非人間性である。

司令部の下士官は、「命令にはありませんでした。このまま食いつなぎ、ポソまで歩いて行ってください」と言い、拳手の礼をして立ち去った。一日、二日の間隔をおいて山崎隊、岩本隊がトミニに到着した。さらに一日おいて病人隊が到着した。彼らは食料を見て狂喜した。彼らも餓死寸前であったことに変わりはない。

私はトミニで大休止することにした。数日間、銀メシを腹一杯食い、缶詰肉で栄養を摂り、病人に充分の治療をほどこして、心機一転、行動に移るためであった。山崎も岩本も異議を唱えなかった。

トミニではタビオカ、バナナ、パパイア、ニワトリなども手に入った。まさに、地獄の草原、山岳、湿地をふみこえて、天国へのトンネルをくぐったようなものであった。ここではロダを雇うこともできた。しかし、ポソまではまだ六百キロもある。東海道五十三次は約六百キロのはずである。ふり返ると、メナドからトミニまで千二百キロも歩いた勘定になる。六百キロなどなんでもない。食料が勇気を与えたのだ。

トミニをでると、北部セレベスのミナハサ半島はほぼ踏破したことのなる。私たちは中部セレベスへと、麒麟の首みtainな地形を南へ南へ、急角度に向きを変えて歩いた。

軍司令部へ

食料もあり、ロダも雇った。歩けない病人だけロダに寄せ、相変わらずの裸体行進で、私たちは歩きに歩いた。風光明媚の海岸線を歩くうちに、誰かが軍歌を歌い出した。みんな唱和した。久しぶりの軍歌である。それほど心身ともにゆとりができたのであろう。

「天に代わりて不義を打つ」から「戦友」を歌い、次はわたしの発声で何をやろうかと思っているうちに、ふと口をついて出てしまったのは「寮歌」であった。兵士たちはとまどったように絶句しておた。「おーい、たまには俺の十八番を聞け！」そうどなっておいて、構わず歌い続けた。

嗚呼玉杯に花うけて 緑酒に月の影やどし

治安の夢にふけりたる 栄華の巷低くみて
向こうが丘にそそり立つ 五寮の健児意気高し

(第一高等学校寮歌)

柳桜をこきまぜて 春も錦となりぬれば
後河原の枝なみに 若き思いも寄するかな

(山口高等学校寮歌)

かつて私は山口高等学校の生徒であった。美しい青春の思い出がよみがえり、熱い血が湧きたった。ふるさとの山河、学友たちの顔が空に回転した。口ダの高熱患者まで、腰を持ち上げて私の方をながめ、にこにこ笑っている。「ああ、おれは生きてるぞ!」という感動が私を満たした。私は八番まで歌い続けた。きわめて高いところで爆音がした。敵機は私たち小部隊など眼中にないのだ。何事もなく通りすぎた。

絶景トミニ湾を左にみて、パダ〜トリプル〜トポリ、と海岸線伝いに村から村へ歩いた。食料はできるだけ節約し、村に入れば現地調達を旨とした。鶏のいる村では、闘鶏用雄鶏を徴発して次の村へ移った。一度、飢餓線上をさまよった苦しみを、二度と繰り返したくはなかった。食料は大事に大事に保管した。

私たちは炎熱下の行軍にも鍛えられて本能的に危機を避け、猛禽類のように苦難をくぐりぬける方法を肌で会得していたのである。

パダ村付近で赤道を突破した。道路の片隅に、苔むした小さな石碑が立っていた。オランダ文字で「赤道ライン」と刻まれている。自分の足で赤道を踏み越えたという、ズシンとした感動が私たちに勇気を与え、もはや「南」に降ったという実感からか、さらに足が軽くなったように思われた。

パリギへ着くとマリサと同じような地形が広がり、ここでも同じようにカヌーを雇って航行した。カヌー上の冒険や恐怖、湿地帯にうごめくワニ、無風状態もスコールも、一度体験した者には「なんでも来い」という度胸がついていた。平気でカヌー上の熟睡をむさぼることができたほどであった。

夜明け前に、長く見かけなかった立派なコンクリートの栈橋へ、私たちのカヌーは着いた。船頭が、ポソとおしえてくれた。司令部から米を支給されて、六百キロを踏破したのだ。メナドから約千七百キロ（青森―東京―大阪―下関）を歩き通したことになる。不思議に一人の死者も出なかった。

昭和十九年も十二月の半ばに達していた。まことに奇跡といってもよいが、トミニからポソまでの六百キロは長いとも感じなかった。我ながら、人間の精神力の強靱さにおどろくほかはない。

ポソ港の栈橋際に都合よく空き倉庫を見つけ私の小隊はそこに宿営していた。この朝、私は見知

らぬ他部隊の兵士にたたき起こされた。彼は第二方面軍司令部大竹少佐の伝令だと言い、不動の姿勢で次の命令を伝達した。「今より十五分以内に、棧橋前に完全軍装で整列すべし」

根耳に水であった。大竹少佐はポソ駐留部隊の隊長で、通過部隊の査問を行うのだという。十五分以内の整列は、岩本部隊に日常軍規が守られているかどうかを、非常呼集の方法で試すらしい。

さあ大変。わたしは山崎小隊、岩本小隊の宿舎へ伝令を走らせた。最近はずっ裸行軍で、軍服はおろか襦袢もろくろく着たこともない。完全軍装となれば、ボタン一つはずれていてもいけない。蜂の巣をつついたような騒ぎであった。

十五分ぎりぎりに汗だくだけの軍装で棧橋前へ整列すると、駆け足で岩本小隊が到着した。山崎小隊はずっと遅れた。宿舎の場所がわからず、連絡に時間がかかったからであった。

私が想像したように、メナドの特別揚塔作業指揮所で富田参謀と獅子吼いていたあの太竹大尉が少佐に進級して、ポソへきていた。大竹は服装検査と兵器検査をしたあと、まず、私たちに発した第一声は「ばかやろー！」であった。

「ばかやろー、遅れてくるとは何事だ。実戦に間に合わん。敵は一秒も待ってくれはせん。服装、態度はだらけきっておる。兵器はすべて手入れ不良。諸子は軍人の魂をなんと心得ておるか。軍規の弛緩しておる証拠だ。バカモノ！」少佐は声を荒げて叱責した。

たしかに銃身の錆びている小銃が六挺もあった。軍隊内務の出来事なら、ただちに営倉ものであろう。しかし、わたしに言わせれば、一晩中イノシシを追い回したり湿地帯を跋涉しているうちに銃身が錆びるのは当然であり、戦闘のない長駆行軍中、実際に小銃は重すぎた。負担でさえあったが、死ぬまでは離すまいとしてここまで損傷なく持ち耐えただけでも、軍人の魂を忘れなかった証拠である。軍規という杓子定規で叱責するのは、少佐が二千キロの行軍を経験したことがなく、佐官標識の赤旗などをなびかせて、乗用車で走っていたための暴言というよりほかはない。白い手をしやがって上官風を吹かすな、と内心想ったが、もちろん口にするわけにはいかなかった。

解散後、私は「ただちに兵器、被服の手入れ」を兵士たちに命じたが、叱責はしなかった。小銃の赤錆は私の責任である。

別命を待っていた私たちに、少佐の命令が達せられた。これより、南セレベスの軍司令部の位置まではトラックによって進軍すべし、というのである。すでに軍司令部の手で、ポソ南方二百キロの山岳地帯に、有史以来のトラック道が完成されていた。私たちには特別トラック数台が配車されることになった。こうなると私は、憑きものが落ちたように軍規厳正な日本軍の小隊長になることができた。

大竹少佐の理不尽な叱咤も、任務上の当然の処置とおもわれてきた。少佐は、私たちの裸体行軍や三個小隊の分離も、ちゃんと知っていた。日本軍の理想から言えば、いかなる言語を絶する状況に遭遇しようと、軍規風紀の弛緩、意気消沈、懦弱、ふしだらには許されない。指揮者は苦難の多寡にかかわらず、あるときには毅然として峻烈な訓練をほどこさなければならない。その点、確かに

私は欠けるところがあった。叱責されるに値する面もあったはずである。

いや、はじめから船に乗せられたら、こんな醜態をだれが好んでさらすものか。トラックを配車された上からは、小隊長同士の確執も霧散するし、裸体で乗車する必要などどこにあらうか。軍規はおのずから確立し、服装はきちんとなり、兵器がいつもピカピカしているのも決して無理ではない。衣食足りて礼節を知るというが、皇軍の面目を立てるのも、それなりの扱いをされてこそである。

私たちは、ヒゲをそり、きちんと軍帽をかぶり、りりしい日本軍兵士の姿勢をとりもどした。後日、数千人の陸海軍軍人および軍属が北東セレベスからポソまで南下してきた。しかし、私たちのように行軍で同じコースをたどった者は一人もいなかった。ゴロンタロもしくはビトン付近から、準備された小型鋼鉄船でポソへ直行している。わずか二、三日の行程であった。

ゴロンタロ～ポソ間、約千二百キロの原始的行軍を敢行したのは、私たち小部隊が最初にして最後であったと言えよう。

トラック輸送の前日、食料の心配がなくなった私たちは、大関、横綱級に飼育してきた雄の闘鶏を「よくやってくれた」と感謝しながらスキヤキ鍋にした。涙ながらの残虐極まりない人間と鶏の別れであった。

ポソを出発して、凸凹道の難コースもあったが、トラックはさすがに速い。五、六時間走ってパロポに着いた。古来、ルー王朝のあるパロポは熱烈な回教徒の町で、南部セレベス一帯に勢力を持つ原住民ブギス族（約三百万人）の本拠地である。

パロポよりさらに二時間驀進すると、第二方面軍司令部の所在地「シンカン」に着いた。シンカンはパインアップルの生産地で、町中がパインの薫香にみたされていた。近くに諏訪湖ほどの大きさの美しいテンパイ湖もあり、日本兵の姿が多く見うけられた。

私たちはさらに南下をつづけ、ラツパンの町に着いたのは夕暮れであった。民家のベランダに宿営したが、セレベス上陸以来、はじめて文明の恩恵に浴したように思った。この町には電灯がついていたのである。私たちは七・八時間トラックに乗っていたが、少しも疲れていなかった。文明がどんなにありがたいものであるかを思い知らされた。

数日後、司令部の守備隊があるマリンプンへ直行した。マリンプンは大草原にかこまれた場所で、ミナハサ半島のクワンダン草原に似ていた。私たちはマリンプン到着と同時に、守備隊長・久保中佐の指揮下にはいった。

草原の中に溝川に近い水流を発見したので、灌木を切り集め、速成のニツパを葺いて宿舎を造った。乞食小屋に近いものであったが、私たちは満足した。

ここもまた一望千里の大草原で、天下の絶景なのである。草原の地肌は珪石のようなものがキラキラひかり、足踏みするとポコンポコンと地響きがした。何やら不気味な草原であるが、野生の鹿が草を食んでいる姿は優雅であり、目もくらむような荒漠たる原野に照りつける真昼の太陽は避け

る木陰とてないとしても、平和そのものの別天地であった。

深紅の熱帯太陽が雄大な空を焦がしてしずかに登り沈む情景はすばらしいものであった。私たちは払暁に起きて、荘厳な日の出を拝んだ。夕暮れには水流に降りて飯盒炊飯をしながら、日輪の没する瞬間と空の色彩を眺めた。これだけでも草原の掘立小屋に住む値打があった。正規の軍隊に掌握された心の安定感も大きく作用していたのであろう。

土民はなぜか、ここを「死の草原」と称して怖れていた。なぜ、地球上にまたとない雄大な絶景地が「死」を意味するのか、この時の私たちは全く知る由もなかった。

この大草原で近く、第二方面軍の総合演習があることを、守備隊の兵士から聞いた。そのためか、司令官みずから参謀をひきつれて視察に来た。

私たちは、守備隊の付属部隊として司令官を迎えた。わたしは、北セレベスからの行軍中に食料を送られた司令官の心づかいに感激していた。敵の反攻を前に、唯一の頼りとする将軍を仰いで、私は感謝の気持ちでいっぱいであった。阿南司令官は台上にたち、私たちの労をねぎらい、激励のことばを与えた。それは力強いが簡潔な、神風式訓示といってもいい。が、私は司令官の偉大な英雄的風貌に魅せられていたにすぎない、品格、清廉、人格高邁という印象が胸を満たした。

(何分かのふれあいではなかったが、阿南大将の鮮烈な印象が今でも胸に刻みつけられているのは、大将が終戦時の陸軍大臣となり、全陸軍の責任を負って割腹自殺をとげられたからであろうか)

わたしは、近く、この草原に展開される「大演習」は、実は反攻上陸の敵を迎え撃つ実戦かもしれないと覚悟した。ある日、敵機から降伏勧告のビラがばらまかれた。私たちは憤激し、空に向かって悪罵を浴びせながら、ビラを粉々に破りすてた。もう日本は負けていると断定した書き方で、無益な戦争をやめて降伏する兵士には危害を加えないなどという思い上がった勧告ビラを、私たちがまじめに受け取るはずはなかった。

すでに南方各地の戦線は、敵の蹂躪するところとなり、じり貧の状況に追い込まれていたが、私たちは信じたくなかった。十月以降、フィリピンに反攻した米軍のため、連日死闘をくりかえしているレイテ島の戦況は、すでに断末魔の様相ををしめしていたが、風のたよりで入ってくる情報は

「敵を腹中におさめたり」というような山下奉文司令官の豪語などであった。セレベスの第二方面軍も、阿南司令官の健在とともに未だ安泰といわなければならない。南方戦線はまだ崩れていないばかりでなく、さらにソビエトを向こうにまわす余裕もある、というような情報が伝わっていた。

全戦局を判断できないツンボ状態に置かれた者の不安は、何も知らない無知を唯一の武器として、希望的観測による勝利を楽天的に信じ込むよりなかった。しかし、この大草原に展開される彼我の

大攻防戦は、現実のものとして私たちに迫っているように思われた。覚悟はしなければならない。

このような状況下で私たちは運命の昭和二十年（1945年）元旦を迎えた。現地米で作った水くさい餅が、それでも一人に二個当て配給された。

二月初旬、関根連隊の主力は、草原の南西三十キロ、南部セレベス西岸のパレパレに到着した。白田副官の一行もトミニ湾を機動船で横切り、ポソ経由でパレパレの主力と合流した。私たちは守備隊の所属を解かれ、原隊復帰を命ぜられた。

過日、冷酷な行軍命令をだした白田副官は、土民から入手したばかりだという活きのよい大カツオのぶつ切りを私たちにふるまった。酒は蒸留椰子酒であったが、「無礼講だ、大いにやれ」と、自ら酌をしまわった。

私たちは素直に喜んで受けた。関根連隊長はマカッサルで特命を受け、まだ到着していなかったが、西村軍曹はじめ私の部下だった下士官・兵の元気な姿に接し、「ああ、原隊というものはいいなあ」と感激しながら、したたかに酔った。部隊合同の宴会は何カ月ぶりであろうか。竹製の急造バラックが壊れるほどの騒ぎである。兵士たちの、狂気に近い酔いっぷり、その騒々しさは、一般民間人の常識では想像できまい。今日は特に、苦難の数か月を克服したあとの「無礼講」であり、激戦と死を予感する異国の島の、生命の噴出ともいうべき酒宴の一刻であった。

私はフラフラと闇夜の外へ出て、いきなり椰子の幹にアタマをぶつけて昏倒した。それほど酔っていたのである。

私たち関根部隊は、またもパレパレ港における夜間荷役作業を命じられた。セレベス島西隣のボルネオ油田地帯バリックパパンから海路運搬されてくる油入りドラム缶をトラックに積み込み、貨物廠へ受け渡す作業であった。

荷役港につきものの空襲は作業開始と同時に頻繁にくりかえされた。爆撃を行ったのはモロタイ島から飛来するB-24重爆撃機である。私たちは、もう、逃げも隠れもしなかった。敵機はパレパレ港湾施設を後々の利用のために保存しようと考えていたのか、あるいは町の住民被害を最小限に抑えようとしていたのか。頻繁に襲来してもめっちゃめっちゃに爆弾を落とすようなことはなかった。ハルマヘラ島でのように皆殺し落下傘付き爆弾を使用するようすもなかった。このような空襲なら、ベテランの私たちには、子供騙しとしか思えない。

パレパレ先駐の日本軍官民は敵機の爆音だけでいちやく防空壕へ退避、または我先に山中へ逃れた。私たちは爆弾の一つ二つ落とされても、雨が降ってきたくらいの顔で平然と作業を続けた。かえって空襲がある方が仕事に張り合いがあった。負け惜しみではない。これしきのことならセレベスの第二方面軍はまだ安泰だ、とふてぶてしく構えていられたからである。

わたしはマラリアの再発で十日間ほど寝込んでしまった。時間を置いて確実に高熱が襲い掛かり、体の芯底から冷え切ってふるえが止まらなくなる。毛布を何枚重ねてもガタガタ震えた。うわごとを言い、ときには絶叫してあばれまわった。熱が引いたあとは食欲がなく、地の底へひきずりこま

れるような虚無感におそわれた。「ああ、本当に戦争はいやだ、軍隊はいやだ」と思うのはそのときである。

おそらく長途の行軍の疲れがどっとでたのに違いない。しかし私には若さと体力と強い生命力があったのだろう。十日後には快癒し、あの恐ろしかった虚無からも立ち直り、再び明るく軍務につくことができた。あの「虚無」には、厭世観や反戦思想があったためではなく、若さと健康を絞め殺しにきたマラリアの、肉体の悪魔がそうさせたのだろう。病気がなると、わたしの精神の襷にはいささかの虚無思想の影すらとどめていなかった。

四月上旬、私に命令がくだされた。小隊の半数を引率して中島中隊の遺骨および遺品をジャワ島へ持参せよ、という命令なのである。

中隊の遺骨は白木の箱に入れ、山崎准尉が厳重に守ってきた。その遺骨をなぜ今頃ジャワ島へ運んでゆくのかわからない。あるいは中島中隊長がジャワ島へ行っていて、中隊の遺骨・遺品を一括内地へ送る便船（もしくは飛行機）に委託するのかもしれない。マレー半島はじめ、スマトラ、ジャワ方面は敵の反攻もなく平穏に、制空権は確保され治安も維持されているという情報であった。

私は命令を受諾し、二個分隊を編成して、パレパレ港より海防艦に乗り込む手はずを整えた。何故か、間際になって命令が変更された。ジャワ行きの編成はそのまま、隊長だけ他中隊の少尉と交替することになったのだ。私と寺内少尉（病人小隊を率いて、トミニから船で追及してきた）の二人が、第二方面軍司令部付を命じられた。

命令によって運命はわかる。どこへ出張したり転出したところで、未来はわからない。わたしにとっては、どちらへころんでもおなじことであった。命令のまにまに歩いて行くしかない下級将校である。

とはいえ、台湾での編成以来、苦楽を共にしてきた部下小隊と別れるのは辛かった。私は、とくに息の合った兵士たち、有本、永井、安岡たちをパレパレ港におくりだしたときは、断腸の思いがした。また、残りの小隊半数、とくに伝令（当番）の田村上等兵とわかれたときは、涙をおさえかねた。私のフンドシ以外の衣類はすべて洗濯をし、食事はもちろん、身の回り一切の世話を焼いてくれた質朴な田村上等兵には、なんとお礼を言っていかなかったほどであった。彼は出征前、蟹工船の乗組員であった。秋田県の留守家族は生活に困窮し、出征援護家族となり、母親は日雇いの労働をしているということである。

みんな、人間としてはくちばしの黄色い若造のわたしを、将校ということでよく仕えてくれた人達である。将校と兵・・・しかし、私たちに限っては仲のよい「戦友」以外のなにものでもない。それでも私と寺内少尉は、パレパレに戦友たちを残し、軍司令部所在地へ転属のため旅立っていかなければならなかった。

（第三部 完）